

歴代誌第一 28章 9節 「父から子への言葉」

1A 「神を知りなさい」

1B 「神について知る」こととの違い

2B 行いに現れる神の知識

3B ご自身を啓示される方

2A 「神に仕えなさい」

1B 奉仕の前の知識

2B 心と思い

1C 全き心

2C 喜んで行う思い

3C 心を探り、思いを読み取られる方

3A 「神を求めなさい」

本文

歴代誌第一 28 章を開いてください。私たちの通読の学びはついに、歴代誌第一の最後になりました。午後は 27 章から 29 章までを読みます。今朝は 28 章 9 節に注目したいと思います。

わが子ソロモンよ。今あなたはあなたの父の神を知りなさい。全き心と喜ばしい心持ちをもって神に仕えなさい。主はすべての心を探り、すべての思いの向かうところを読み取られるからである。もし、あなたが神を求めるなら、神はあなたにご自分を現わされる。もし、あなたが神を離れるなら、神はあなたをとこしえまでも退けられる。

ダビデは、神殿建設のために、いろいろな準備をしました。神殿のための資材を集め、そしてイスラエルの国が神殿礼拝を中心にして統治されるべく、その統治機構を確立しました。そして自分が死ぬ時に、その前に、力をふりしぼってイスラエル人のかしらたちの前に立って、最後の言葉を残したのです。そして、今、息子ソロモンに対して語りかけました。父が子に残す言葉は何か？その大切な命令は何なのか？その受け継がれる言葉に注目したいと思います。

1A 「神を知りなさい」

1B 「神について知る」こととの違い

ダビデがソロモンに残した初めの言葉は、「今あなたはあなたの父の神を知りなさい。」です。「知りなさい」という命令です。この「知りなさい」というヘブル語は、親密に知る、個人的、人格的に知ることを意味します。アダムがエバを「知った」という時の「知る」と同じ言葉が使われています。

「あなたの父の神を知る」と言っていることに注目してください。ソロモンは、神がダビデと共におら

れたことを目撃しました。ソロモンは神を信じ、神を愛するダビデの指導の中で生きていました。この神をあなた自身が知りなさい、という意味です。父任せの信仰ではなく、あなた自身が直接、知っていくのだと言っています。

ユダの王の中でヨアシュという人がいましたが、「ヨアシュは、祭司エホヤダが彼を教えた間はいつも、主の目にかなうことを行なった。(2列王 12:2)」祭司エホヤダが教えていた間は、主の目にかなうことを行ないましたが、エホヤダが死んだ後、彼は主の目に悪を行いました。エホヤダに言いつけられていたことは行っていたのですが、自分自身が神を知らなかったのが、彼が死んだ後、神に背を向けたのです。ですから、いかに教えられていることが自分自身のものになっているのかどうか、自分の信仰を確かめなければいけません。

使徒信条という、初代教会から受け継がれている信仰の告白文がありますが、そこには、「我は信ず」という言葉が続いています。「我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず。我はその独り子、我らの主、イエス・キリストを信ず。…」とあるのですが、他の人々のことは知らないが、**私は**父なる神を信じて、子なるキリストを信じるのだ、という告白です。自分自身がこの方を信じて、この方に従うのだ、という決意であり、告白です。父なる神はあくまでも父であり、祖父にはなりえないのです。誰かを介して父なる神を信じることはできず、唯一、イエス・キリストという仲介を通してのみ、直接、神を知らなければいけません。

パウロは、「私は、キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることも知って、キリストの死と同じ状態になり… (ピリピ 3:10)」と言いました。キリストとその復活の力を彼は知りました。私たちは、キリストとその復活の力を知ったでしょうか？イエスご自身が、わたしの名によって祈ればそれは聞かれると言われた、私たちの集いの只中におられるのですが、私たちはこの方とその復活の力を知っているでしょうか？

イエスについて知っているけれども、イエスご自身、またその力を知らないということが起こりえます。長血を患う女のことを思い出してください。イエス様のところに、大勢の群集が押し寄せていました。この方が歩こうにも、押し合い、押し合いで、なかなか前に進むことがおできになりません。ところがイエス様は、「誰がわたしの服に触ったのですか？」と尋ねられたのです。こんなに多くの人が物理的にイエスを触っているのに、「わたしの服を触った」とイエス様は言われるのです。ご自身から、その力が出ていったことを知ったからです。

その触れた手は、自分が汚れているとされている長血を患っていた女の手でありました。モーセの律法では生理による出血があれば不浄であるとされていて、不正出血が続くのであれば、その間はずっと汚れているとみなされていました。医者に十二年間通っていたのに、かえって状況は悪くなっているという悲惨な状態でした。その状態のまま、イエスに近づいたのです。そして、彼女には大きなリスク、危険がありました。自分が汚れた者なのに、人込みの中に入るという危険です。彼女は、

自分の癒された後に、「イエスに真実を余すところなく打ち明けた。(マルコ 5:33)」とあります。

イエスを知る、そしてその生きた力を知るには、自分の負い目を含め、ありのままの姿で出ていかなければいけないのです。自分の苦しみ、その恥、そして罪、こうしたものを全て持って行って、初めてイエスを知ることができます。他の群集は、イエスについて知っていましたが、イエスは知りませんでした。私たちも、ともすると教会という群集になってしまっていることがあります。イエスについての知識は与えられたけれども、イエスは知らないということが起こります。だからダビデはソロモンに、「神について知りなさい」とは命じませんでした。「神を知りなさい」と命じたのです。長血を患う女のような、恥も何もかも主の前に持っていく信仰が必要です。

2B 行いに現れる神の知識

そして、神を知っているかどうかは、その人の行いに現れます。私たちは、神についてはいろいろなことを語ることができます。けれども、神を知っているかどうかは、神のことを語る以上に、行動にしっかりと現れます。ある人々は、「私はキリストを愛しているが、教会は嫌いだ。」と言います。その人は嘘をついています。その人は、神を知らないし、キリストも愛していません。使徒ヨハネがこう言いました。「神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません。(1ヨハネ 4:20)」

そしてイエス様は、『主よ、主よ。』と言う者がみな天の御国にはいるのではない。」と言われました。そのように叫ぶ者たちは、イエスの名によって悪霊を追い出し、預言を行い、他のあらゆる奇蹟を行ったのではないかと叫びますが、イエス様はこう答えられます。「わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。(マタイ 7:23)」どんなにイエスの名前を口から発していても、イエスは彼らを全然知らないと言われたのです。それは、彼らの行いに現れており、その不法が、彼らがイエスを知らなかったことを現していました。

一人一人が、どれだけ主に捧げているのか、その愛の献身にも神の罪の赦しを受け取っているかがはっきりします。パリサイ人シモン家にイエスが招かれた時に、不道德な女、おそらく遊女だったので、その女がイエス様の足を涙で濡らし、髪の毛で拭き、足に口づけして、香油を塗りました。この女の行動についてイエス様はこう言われたのです。「この女の多くの罪は赦されています。というのは、彼女はよけい愛したからです。しかし少ししか赦されない者は、少ししか愛しません。(ルカ 7:47)」彼女がよけい愛したから、多くの罪が赦されていると主は言われます。彼女が神からの罪の赦しを多く知っていたからこそ、それがイエス様を愛するという行為に現れていたのです。

もちろん私たちは、神に愛されるために、良い行いをするわけではありません。そうではなく、神を知っている人、神を愛している人は、自ずとその行いに神の知識が現れるのです。

3B ご自身を啓示される方

では、どうすれば神を知ることができるでしょうか？この方を知るために、イエス様の父なる神への賛美を取り上げてみたいと思います。マタイ 11 章 25-27 節を読みます。「天地の主であられる父よ。あなたをほめたたえます。これらのことを、賢い者や知恵のある者には隠して、幼子たちに現わしてくださいました。そうです、父よ。これがみこころにかなったことでした。すべてのものが、わたしの父から、わたしに渡されています。それで、父のほかには、子を知る者がなく、子と、子が父を知らせようと心に定めた人のほかは、だれも父を知る者がありません。」イエス様がこの発言をされる前に、イエス様の宣教の本拠地であったカペナウムや、コラジン、ベツサイダに対して、呪いを宣言されました。イエスについては、数多くの言葉を聞き、そして数多くの御業を目撃しました。それにも関わらず、彼らは神を知ることがありませんでした。

けれども弟子たちは知ることができた。なぜか？イエス様は、「父なる神がご自分を現してください」と言われています。子なるキリストが父なる神を知らせると定めた人にもみ与えられるのです。これを難しい言葉で「啓示」と言います。自分の知的努力で悟ろうとしても不可能であり、むしろ、主がご自身を皆さんに現してくださいます。

では、自分は何もしなくてよいのか？いいえ、イエス様はこう言われました。「賢い者や知恵のある者には隠して、幼子たちに現してくださいました。」幼子のようにイエスの言葉を受け入れる者に、イエス様はご自身を現してくださいます。主ご自身を知っていると証言して下さった人々、ここで私は主に会ったと言われる人々の全てが、何らかの形で幼子のようにイエス様の語りかけを受け入れています。これまでの経験や知識を捨てて、ただ自分が幼子のように神に信頼し、そして服従するに神がご自身を現してくださいます。人は本来、神によって造られ、神に自分の命の全てがかかっているのに、まるで自分で生きてきたかのように思い込んでいるのです。けれども、その誇りを捨ててへりくだって神の言葉を受け入れる時に、神は喜んでご自身を現してくださいます。

そしてイエス様は続けて、マタイ 11 章 9 節で、「わたしから学びなさい。」と命じておられます。イエス様のところに来た後で、「私には、これだけの知恵と能力があるのだから、それを生かして主に仕えるのだ。」と間違っただけ考える人が多いです。そうではありません、幼子のように受け入れたのですから、幼子のように、あるいは学徒のようにしてイエス様の教えと指導の中にとどまるのです。そして神が由とする時に、自分を神が用いてくださり、主の働きをすることができています。

2A 「神に仕えなさい」

そこでダビデのソロモンに対する二つ目の命令です。「全き心と喜ばしい心持ちをもって神に仕えなさい。」神に仕えなさい、という命令です。

1B 奉仕の前の知識

仕える、あるいは奉仕する、働く、と言っても良いでしょう。神に仕えることについて、大事なものは、

神を知りなさいという命令に従った者のみが神に仕えることができる、ということです。これは先週学びました、イエス・キリストを知るといふ土台があって始めて、自分が神の神殿として主の働きという建物を建てることのできる、ということです。主なる神との親密な関係があってこそ、そこから出てくる神の力に拠り頼んで、それで力ある働きをすることができます。私たちの奉仕の力は、関係の中にあるのです。

2B 心と思い

1C 全き心

ダビデはまず、「全き心をもって」仕えることを教えています。つまり、一つ心になることです。二心にならないことです。「真心」と言ってもよいでしょう。

多くの人が、全き心ではなく、半分の心、つまり中途半端に主に仕えています。イエス様の名を信じて、イエス様によって救われました。けれども、自分が前々から行いたいと思っていたこと、やりたかったことがあります。それもやりながら、そして主に仕えていこうと考えます。使徒パウロは、キリスト者の倫理基準をこう教えました。「すべてのことが私には許されたことです。しかし、すべてが益になるわけではありません。私にはすべてのことが許されています。しかし、私はどんなことにも支配されはしません。(1コリント 6:12)」自分の行うその特定のことが必ずしも罪ではありません。けれども、パウロがここで「すべてが益になるわけではない」と言っているのは、ちょうど短距離競走の選手のことを思い出せば良いです。登山靴を履いて出場してもよいのです。けれども、目的から大きくずれるのです。キリストという目標に向かって走っている時に、他に自分の行いたい夢や願望も持ちながら走っていこうとするなら、その夢が足かせとなっていきます。

全き心とは、「私は、イエス・キリストのものになりました。だから、私はすべての権利、願望、何もかもあなたの前に置きます。」とすることです。主が命じられることだけを行う、という決意です。そのように僕の姿を取った者に対して主は、「あなたは、ここに留まっていなさい。このことを行ないなさい。」と命じられます。これを召しと呼びます。召しがあれば、自分が行うことは神の御心を行うことで、魂に満足と安らぎが与えられるのです。

その時に初めて、信じる前に既に与えられていた神の恵みと賜物が生かされるかもしれません。使徒パウロが、すでにギリシヤ語とギリシヤ文化を持ちながら、ユダヤ人として生き、律法を厳格に学んでいったからこそ、また生まれながらローマ市民であったからこそ、彼は他の使徒には成し遂げられなかった異邦人宣教を行うことができました。けれども彼自身は、こうした誇るべきものは、「私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損とと思っています。(ピリピ 3:8)」と言っているのです。自分の能力を生かそうなんて言うことは一切、考えていませんでした。むしろ足かせになる、損になることを知っていました。けれども、このように一切を捨てて主に従う決心をしたからこそ、主は、彼が生まれ育ちの時にすでに神に与えておられたものを用いるようにすることができたのです。ですから、全き心で主に仕えます。

2C 喜んで行う思い

それから、「喜ばしい心持ちをもって」とあります。口語訳では「喜び勇んで」、新共同訳では「喜びの魂をもって」と訳されています。英訳では、“willing mind”すなわち、「自ら進んで行う思いをもって」ということです。

喜びというのは、聖書では単なる感情ではありません。むしろ、もっと意志の含まれたことです。もっとはっきりと定義するなら、「誰からも強いられてでもなく、自分が主に仕えたと決める」ということです。イエス様は、「ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。(ヘブル 12:2)」とあります。十字架の辱めを、喜びのゆえに忍んでおられたのです。イエス様は、強いられてでもなく自らの意志で命を捨てられました。「だれも、わたしからいのちを取った者はいません。わたしが自分からいのちを捨てるのです。(ヨハネ 10:18)」父なる神から命じられたことでありますが、それを強いられてではなく、自ら御父の命令に従うという決めておられたからこそ、そこに喜びがありました。

私たちには、はっきりと神から命じられているものがあります。例えば次の章 29 章には、ダビデが自ら進んで、神殿のために金銀を捧げる者はいないか？と呼びかけ、イスラエルのかしらたちの多くが応答して、自ら進んで、喜んで捧げました。主に自分の財産を捧げることは命令ですが、その命令を強いられてではなく、むしろ自分が捧げますと意志を働かせて応答する時に、捧げる喜びを味わうことができます。神の命令は強制ではありません。神の命令には全くの自由があります。けれども命令なのです。だから、やってもよい、やらなくてもよい、という趣向ではなく、自らの意志をすべて落として、「私は、あなたの命令に従います。」という動機の服従、自由意志を強く働かせるのです。

3C 心を探り、思いを読み取られる方

そしてダビデが、「全き心をもって、喜ばしい心持ちをもって主に仕えなさい」と命じたのには、理由があって、「主はすべての心を探り、すべての思いの向かうところを読み取られるからである。」とあります。有名な詩篇 139 篇の一部を読みます。「主よ。あなたは私を探り、私を知っておられます。あなたこそ私のすわるのも、立つのも知っておられ、私の思いを遠くから読み取られます。あなたは私の歩みと私の伏すのを見守り、私の道をことごとく知っておられます。ことばが私の舌にのぼる前に、なんと主よ、あなたはそれをことごとく知っておられます。あなたは前からうしろから私を取り囲み、御手を私の上に置かれました。そのような知識は私にとってあまりにも不思議、あまりにも高くて、及びもつきません。(1-6 節)」

ですから主は全て知っておられます。まず、「心」を知っておられます。もし、同じ奉仕を行っていても、その動機が自分の充足感を満たすために行うのであれば、それは肉です。また他人の評価を気にしながら行っているのであれば、同じく肉の行いです。人にかまってもらうことを願っている、あるいは人の世話をすることで自分のやりがいを見出しているのなら、それは、表向きは「愛」に見えるかもしれませんが、実は肉であります。そのよう栄光は主ではなく、自分に向かっています。こうした心の

動きをすべて、主は知っておられます。

そして、思いの向かうところを読み取られる、と言われます。自ら進んで行っているのではなく、人に言われているからという理由で行っていることも、主はすべて読み取られています。そうではなく、そうしたことも主が与えてくださった奉仕だと思って、喜んで行っているその思いも読み取られています。強いられて行っている時、表向きは他の人に知られておらず他の人を騙すことはできても、神は騙すことはできません。私たちは主の前に、裸なのです。全てが知られています。その神に対して私たちは仕えていますから、全き心で、また自ら進んで行う思いをもって主に仕えます。

3A 「神を求めなさい」

そして9節の最後に「もし、あなたが神を求めるなら、神はあなたにご自分を現わされる。」とあります。神を知りなさいという命令、神に仕えなさいという命令をダビデはソロモンに行い、そして「神を求めなさい」という命令を行っています。

「求める」というのは、探究すると言い換えても良いでしょう。自分の時間を、ある事柄を知るために心を定めている状態です。自分が今、どのようなことに時間を費やしているでしょうか？それが、何かの趣味であったなら、その趣味を求めているのです。何か友達とグルメに興じていたら、あるいはファッションを楽しんでいたら、それが自分の求めている対象です。

それを「神」にしなさい、というのがここでの命令です。神についての事柄であれば、私たちは情熱を注ぎやすいです。神の祝福、神の癒し、神の力であれば、「祝福」「癒し」「力」に焦点を合わせて求めることができます。そして、愛、平和であっても、愛を求める、平安や平和を求めることは簡単です。しかし、それらのすべての源であられる神ご自身を求めるには、鍛錬が必要です。自分を捨てなければいけません。自分が神の前でひれ伏さないといけません。

そうすれば、約束があり、「神はあなたにご自分を現される」とあります。主が、イスラエルにこう約束されました。「あなたがたがわたしを呼び求めて歩き、わたしに祈るなら、わたしはあなたがたに聞こう。もし、あなたがたが心を尽くしてわたしを捜し求めるなら、わたしを見つけるだろう。わたしはあなたがたに見つけられる。(エレミヤ 29:12-14)」次回学ぶ、歴代誌第二1章において、ソロモンに神が現れてくださいました。それは彼が、青銅の祭壇に全焼のいけにえを捧げたその夜のことでした(6-7節)。神を求めている人に対して、神は必ずご自身を現されます。そして、ソロモンはその時に必要だった知恵と判断力が与えられました。そこで神の御心をさらに行っていくことが可能だったのです。

いかがでしょうか、私たちも同じように、信仰を受け継いでいきたいですね。神を知りなさい、神に仕えなさい、そして神を求めなさいという命令をもって伝えていきたいです。それぞれが神の前に出て、神に与えられた責務を果たしていきましょう。